

氏名	大片 久
授与した学位	博士
専攻分野の名称	保健福祉学
学位授与番号	博甲第143号
学位授与の日付	令和4年3月24日
学位論文の題目	高齢期の Mental well-being を促進する心理社会的要因—健康生成論的アプローチ—
学位審査委員会	主査 坂野 純子 副査 中村 光 副査 村社 卓 副査 住吉 和子 副査 川上 貴代

学位論文内容の要旨

【研究背景・目的】超高齢社会を突き進む我が国において、平均寿命のみならず健康寿命も延伸する中で「活動的で健康的な老い」が注目されるようになり、疾病予防や生活機能の維持にとどまらず、QOL ならびに主観的幸福感や人生満足度などを含む well-being (ポジティブな精神的健康=Mental well-being: MWB) の追及が重要視されている。心身の老化や社会的役割、人間関係における喪失体験を経験する高齢期では精神的な不調を来すと考える従来の高齢者観とは異なり、近年では多くの高齢者で MWB は維持されていることが示されており、これが高齢者の健康の維持・増進の一因となっているものと考えられる。他方で、健康生成論を提唱した Antonovsky によれば、日常生活で絶えず生じるストレス対処において、「汎抵抗資源 (GRRs)」と呼ばれる内外の対処資源を状況に応じて、柔軟かつ適切に選択・動員する力であって、自身の生活世界は首尾一貫している、筋道が通っている、腑に落ちるという感覚、確信、志向性でもある Sense of coherence (SOC) (特に下位因子の有意味感) が、MWB を予測する主要概念であることが示唆されている。しかし、本邦の高齢者の MWB を説明する心理社会的要因を検討する研究は非常に少なく、また、SOC の3つの下位因子が MWB に与える影響の相違については十分に検討されていない。さらに、SOC と関連し MWB へ寄与する資源の特徴も十分に明らかにされていない。そこで、本研究では、第1章で高齢期の MWB を促進する身体機能および SOC (下位因子の相違) を含めた心理社会的要因を検討すること、続く第2章では、関連が認められた GRRs と MWB との関連に SOC が媒介する因果モデル (媒介効果モデル) を構築し当該仮説モデルを検証することと、SOC および MWB を促進する当該資源の特徴の詳細を明らかにすることを目的にした。

【方法】地域在住の60歳以上の高齢者567名を対象に、無記名自記式の質問紙による横断調査を実施した。調査内容は、基本属性 (年齢、性別、教育歴、婚姻状況、同居家族、就労状況、暮らし向き)、心身の健康状態・機能 (運動器、口腔、低栄養、SOC、

Mental Health Continuum : MHC、Kessler psychological distress scale 6 : K6)、ソーシャル・サポートの授受等の知覚を評価する社会関係 (Social provisions scale : SPS) であった。第 1 章の解析方法は、目的変数に精神的健康を評価する MHC 得点 (ポジティブ面) あるいは K6 得点 (ネガティブ面)、説明変数に step1 (強制投入) に基本属性、step2 (強制投入) に心身の健康状態・機能および社会関係資源を投入した階層的重回帰分析であった。あわせて、SOC 合計点に代えて下位因子得点を投入した分析も実施した。次の第 2 章では、関連が認められた GRRs を始点に MWB へのパスおよび SOC を介して MWB へと至るパスを結んだ媒介効果モデルを構築し、間接効果、直接効果、総合効果についてパス解析により検証した。また、関連資源の特徴の詳細を明らかにするために階層的クラスタ分析 (Ward 法・ユークリッド距離) を行い、類型化されたクラスタの差別化の検討および妥当性の確認をそれぞれ共分散分析により検討した。

【結果と考察】 欠損値のない 543 名のデータ (有効回答 : 95.8%) を用い、初めに MWB (MHC スコア) を説明する心理社会的要因を検討した結果、年齢 ($\beta=0.172$) と暮らし向き ($\beta=0.086$) の他に、社会関係資源 (SPS 得点 : $\beta=0.115$)、SOC ($\beta=0.421$) が有意に関連した。一方、ネガティブな精神的健康 (K6) を説明したのは、年齢 ($\beta=0.184$) と低栄養状態 ($\beta=0.092$) の他に、SOC ($\beta=-0.558$) であった。続く、SOC の 3 つの下位因子を投入した検討では、MWB に対しては SOC の下位因子の中でも有意味感 ($\beta=0.401$) のみが有意に関連し、ネガティブな精神的健康に対しては、3 つの下位因子すべてが有意に関連した (把握可能感 : $\beta=-0.327$ 、処理可能感 : $\beta=-0.203$ 、有意味感 : $\beta=-0.125$)。以上の結果から主要な GRRs が社会関係資源であることが判明したため、社会関係資源を始点に MWB を結ぶパスと SOC を介して MWB へと至るパスを結んだ媒介効果モデルを構築しモデルの検討を行った。その結果、MWB に関しては直接効果 (0.012, 95%CIbs[0.04, 0.19])・間接効果 (0.06, 95%CIbs[0.02, 0.09]) が共に有意であり部分媒介が成立した。一方で、ネガティブな精神的健康は間接効果のみ有意であり (-0.08, 95%CIbs[-0.12, -0.03])、完全媒介が成立した。他方、社会関係資源を表す SPS の下位因子得点のパターン (主に受領的サポートと提供的サポート) や特性の程度から 4 つのクラスタへの類型化が妥当であると判断された。第一クラスタは受領・提供的サポートが平均域よりやや高く提供よりも受領が低い「中受領中提供群」(n=139)、第二クラスタは提供的サポートが平均域より低く、受領的サポートが平均域よりやや高く乖離がある「中受領低提供群」(n=62)、クラスタ 3 は受領・提供的サポートが平均域より大幅に高く提供よりも受領が高い「高受領高提供群」(n=70)、クラスタ 4 は受領・提供的サポートが平均域より大幅に低く提供よりも受領が低い「低受領低提供群」(n=272) とそれぞれ命名し群として類型化した。各群の差を比較検討した結果、「高受領高提供群」が他の 3 群よりも SOC スコアおよび MHC スコアが有意に高く、また、提供的サポートが低く受領的サポートが比較的高く不均衡な「中受領低提供群」は他の群とは異なり、ネガティブな精神的健康を評価する K6 スコアが有意に高いという特徴が見出された。

【結論】本研究により、本邦の高齢者において MWB の維持・促進には健康生成論の中核的概念である SOC、特に有意味感が有意に関連し、また、主に受領および提供的サポート知覚からなる社会関係も重要な資源であることが示唆された。特に、SOC を媒介として MWB を促進させるためには、社会関係資源への介入やそのための環境調整が保健福祉政策の実践において有効であることが、詳細な分析により明らかになった。

主業績

No.1	
論文題目	Sense of coherence (SOC) における有意味感は高齢者の Mental well-being を促進する
著者名	大片 久・澤田 陽一・大形 篤・矢嶋 裕樹・坂野 純子
発表誌名	厚生の指標, 第 69 巻, 第 4 号, 2022 年 4 月発刊 (現在校正中).

副業績

No.1	
論文題目	ポジティブな精神的健康をとらえる日本語版 Mental Health Continuum Short Form (MHC-SF-J) の高齢者における妥当性と信頼性の検証
著者名	大片 久・澤田 陽一・矢嶋 裕樹・坂野 純子
発表誌名	老年社会科学, 第 43 巻, 第 3 号, 262-273 頁, 2021 年 10 月.

関連業績

No.1	
論文題目	地域高齢者を対象とした Social Provisions Scale (SPS) 短縮化の試み—項目反応理論分析による検討—
著者名	大片 久・澤田 陽一・矢嶋 裕樹・矢庭 さゆり・坂野 純子
発表誌名	岡山県立大学保健福祉学部紀要, 第 25 巻, 27-35 頁, 2019 年 3 月.

論文審査結果の要旨

本博士論文は、超高齢社会を突き進む我が国における高齢者のポジティブな精神的健康、すなわち Mental well-being (MWB) を促進する要因を、世界保健機関 (WHO) の健康増進の哲学的基礎として位置づけられている「健康生成論」に基づいて検証したものであり、得られた成果は以下の通りであった。

1. 地域在住の 60 歳以上の高齢者を対象に社会調査 (横断調査) を実施し、欠損のない 543 名のデータから、MWB を促進する要因を重回帰分析により明らかにした。主要な要因は健康社会学者 Antonovsky が見出した個人特性「Sense of coherence (SOC)」と多次元的なソーシャル・サポートを評価する「社会関係資源」であった。特に、MWB に対して強い関連を示したのは SOC および当該概念の下位因子である「有意味感」であり、有意味感は自身の生活世界の理解を深め、アクセス可能な資源を見出すための動機づけに関する因子である。加齢により否応なしに自身の生命および死に直面する高齢者において、SOC が強いこと、あるいは高い有意味感を有することは、主観的幸福感や人生満足感、生きがいや自己実現等の要素を含む MWB の促進にとって重要であることを示すに至った。

2. SOC は 30 代まで発達し高齢期に至るまで安定した後、減少すると仮定されてきた。近年では老化による活動性や認知機能低下リスクはあるものの生涯にわたって発達し続ける可能性も指摘されている中で、健康生成論が包含する資源理論に着目し、社会関係資源の MWB に対する直接効果のみならず、SOC を介して MWB を促進する間接効果 (媒介効果モデル) の検証をパス解析により行った。その結果、海外の報告と一致して、SOC の直接的な強化のみならず、弱い SOC の高齢者であっても社会関係資源への介入により MWB が直接的に高まり、かつ、SOC を機能させ間接的に MWB が高まることを示した。さらに、当該モデルの始点となった社会関係資源の多次元的なソーシャル・サポートに係る下位因子に着目し、クラスタ分析からどのようなパターンによって、SOC や MWB が影響を受けるのかや、リスク高齢者の特徴を探索的に検討し、相応の結果を明確にした。

以上の結果より、本研究は学術上、高齢者の活動的で健康的な老いを実現させるための重要な示唆を提供する結果であり、審査員の質疑応答への回答も申し分なかったことから、本論文は博士 (保健学) の学位論文として十分に価値のあるものと判断し、合格とした。